

御嶽山噴火 火山災害に遭遇して～噴火の恐怖と登山者がもつべき意識～

小川 さゆり (南信州山岳ガイド協会
中央アルプス地区遭対協救助隊員)

はじめに

2014年9月27日11時52分ころ、御嶽山が突然噴火した。噴火により58名の登山者が尊い命を落とされ、現在も5名が家族のもとに帰ることができていない。謹んでお悔み申し上げるとともに、心からご冥福をお祈り申し上げたい。

噴火は登山者が山で遭う危険として、これまで身近に感じてはいなかったのではないかと。御嶽山噴火を、登山者が巻き込まれた運の悪い自然災害で終わりにするのではなく、多くの登山者が命を落とし、生還した登山者も身体に心に深い傷を負った現実からわずかでもこの先に繋がる教訓を学びとり、伝え継いでいきたい。なぜなら過去に登山者が噴火に遭った事例はあったが、詳細な情報や、教訓は目にすることがないからだ。

私は噴煙を見た瞬間「あれ。噴火に遭った時どうすればいいんだっけ？」そう思った。雪崩や雷、低体温症など山で遭う危険への対処法、回避法は知識として知っている。だが噴火の対処法の知識はなく、私自身が考えたこともなかった。教訓は結果からでしか学べない。噴火の種類、規模では一瞬にして命を奪われることもあるだろう。何が役立つ教訓なのか、その時にならないと分からない。しかし、結果を丁寧に積み上げ残していくことが、この先に必ず繋がるはずである。

人が命を落とすとき、必ずそこには命を守る手があるはずである。先人が残してくれた危険から命を守る手がかりのように、御嶽山噴火が少しでも命を守る手がかりを未来に残せればと願っている。

御嶽山という山

御嶽山は、長野県と岐阜県にまたがる標高3,067mの独立峰の活火山である。古くから御嶽教の信仰の対象とされ、夏には多くの信者が登る。登山口は5つあるが、人気のある王滝口、黒沢口登山道はいずれも7合目近くまで交通機関を利用して行くことができ、登山道も整備され山小屋も多いことから、子供から年配者まで幅ひろい世代の登山者に親しまれている。また「日本百名山」の1つでもある。

噴火の歴史を振り返ると、有史初1979年10月28日に今回と同じ規模の水蒸気噴火をしている。その後1991年、2007年にもごく小規模の噴火があったようだ。1979年の噴火は、山頂の小屋は今回同様噴石により破損したが、登山シーズンを外していたため登山者も少なく、また噴火がゆっくり始まったことで登山者は逃げる事が出来た。そのため火山ガスが漂う暗闇の中、噴石が飛び交う地獄絵図は誰も見てはいなかった。今までの噴火では命を落とした登山者はいなく、噴火に遭った際、命を守る教訓、そして噴火の恐ろしさは伝え継がれてはいない。

噴火に遭う

噴火当日、私は、ガイド登山の下見に黒沢登山道を単独で登っていた。9月10、11日と火山性地震（マグマなどの火山活動によって発生する地震）が50回を超えたニュースを見ていたがその後終息し、警戒レベルも1だったので噴火を意識することはまったくなかった。登山者は、活火山だと知っていた人、

知らなかった人、警戒レベルを安心材料にした人、それぞれだったと思う。慎重な登山者は、地震の情報からそもそも御嶽山には近づかなかったのではないだろうか。晴天、紅葉、そして土曜日という絶好の登山日和のなかで登山者全員に共通していたのは、「今日噴火するわけない」「生死を分ける危険に遭うわけがない」という警戒感の欠如であり、誰もが自然の厳しさ、恐ろしさを忘れていたと思う。

頂上手前から横道を通り、八丁ダルミを経由して山頂の剣ヶ峰には11時30分に着いた。山頂の広場、一段下りた岩場や祈祷所裏の岩場、合わせると剣ヶ峰だけで100人ほどの登山者が晴天の山頂を満喫していた。登頂を喜ぶ登山者の楽しそうな会話や笑い声が溢れていた。



頂上周辺地形図

11時42分、私は祈祷所脇を通り抜けお鉢廻りに歩き出した。後日知ったが、噴火10分前から火山性微動（マグマや水蒸気の地下の移動や、沸騰し気泡が発生することなどで起こる地表の微弱な振動）、地殻変動（マグマなどの上昇で山が膨らむ山体膨張）が確認されていたという。何らかの前兆はあったのかも知れない。ガスの臭いはしていたが、特別危険を感じさせるほどではなかった。落石などもなかった。登山者が感じるレベルの前兆は特になかったと思う。

11時52分。剣ヶ峰からザレを下り、登り返す。一ノ池の外輪手前で背後から「ドドーン」という、そう大きくない音を聞いた。振り返ると噴煙はすでに見上げるほど高く上がり、横にも急速に広がっていた。青空には黒い粒が無数見えた。それは爆発とと

もに舞い上がった噴石だった。噴煙を見た瞬間「噴火した。嘘だろ」そう思った。急速に発達する噴煙は、理屈抜きに危険が迫っていると察するには十分すぎるほどの存在感だった。立ち止まり噴煙を見上げることも、写真を撮ることもしていない。即座にその場で出来る命を守る行動に移った。舞い上がった岩はいずれ落ちてくる。「頭を守らなければ」落石から身を守る対処法で登山道脇の岩に張りつき、できるだけ小さくなった。私になんとか隠れる、そう大きくない岩だった。体が勝手に動いた。本能だったと思う。考えている暇などなかった。それと同時に視界を遮るキツイ臭いのガスに巻かれた。ガスを吸わないように襟を引っ張り出し口元にあてた。我慢していたが、苦しくて、苦しくて呼吸をしてしまう。酸素ではないので吸えば吸うだけ苦しくなっていく。吸い込んだガスのせいなのか、口の中は水分がなくジャリジャリで喉も張り付きそうだった。ルックザックを下ろし水やタオルを出すことさえ許されない。そんなことさえ命取りになるほど状況は緊迫していた。60秒ほどだったのではないだろうか。それ以上ならここで死んでいた。限界だと思ったその時、視界がうっすらと戻り、ガスの臭いはしていたがなんとか呼吸が出来るようになった。噴煙を見てから2分弱。ついに舞い上がった噴石が空気を切り裂くような絶望的な音をたて大量に降ってきた。山肌にぶつかり、また空中で岩同士がぶつかり砕け四方八方に飛び散る。時速200、300kmとも言われている。周囲は焦げ臭い。噴石が凄まじい音をたて体をかすめ飛んでいく。噴火だと思い即座に行動したものの、こうした状況を受け入れることが出来なかった。何かの間違いだと思いたかった。目の前の恐怖に、身近すぎる死にすぐには順応できなかった。「このままだと死ぬ」その思いだけは強かった。

噴煙を見てから6分後くらい、冷たい新鮮な空気

4. その他

が吹き込み、少しのあいだ噴石が止んだ。「頭が守れる岩陰を見つけないと」立ち上がり一ノ池方向の急斜面を駆け下り、大きな岩の下に不自然に空いた小さな穴を見つけ頭を突っ込んだ。153cmの私が、がんばっても背中の中半分しか入らない、そんな小さな穴だった。左足と両腕はなんとかねじ込んだが、腰と右足は入らなかった。そしてすぐに2回目の爆発があった。この時、私のいたお鉢は、目の前にかざした手のひらさえ見えない漆黒の闇となった。

この後50分は暗闇。生暖かいガスと冷たい空気が繰り返し絶えず来ていた。冷たい空気が来るとうっすら周りが見えた。暗闇のなか噴石が再び凄まじい音をたて飛んで来る。山肌にぶつかり砕けた破片が右足にバチバチあたる。幸いダイレクトに飛んで来たものには当たらなかった。そして噴石が飛び交うなか火山灰がザンザン降り出し、あっという間にしゃがんでいる腰まで埋まった。熱くはなかった。その灰を手が届く範囲で集め体を更に埋め、飛び散る噴石に備えた。目まぐるしく状況が変わる。この先の展開が想像できないこと、情報がないことがとにかく恐怖だった。「まだ生きている」そう声に出して生きていることを確認していた。突然放り込まれた地獄の闇を生き抜くには、自身の五感と理屈抜きの直感だけが頼りだった。「山に試されている」そう思えた。

噴石が飛んでくる凄まじい音はしていたが、火山灰が山肌を覆ったことで噴石が灰に吸い込まれ飛び散らなくなっていった。うっすらと見えたその光景は、なんとも不気味で現実感のない趣味の悪い映画のようだった。

暗闇の中考えていたことは、噴火直後は恐怖と悔しさだった。空気を切り裂く凄まじい音をたて飛んでくる噴石はとにかく恐ろしかった。死を覚悟させるには十分すぎた。そして活火山に登っているながら噴火をまったく想定していなかった危険に対する想

像力の甘さ、そして今まさにその噴火でなす術もなく死のうとしている自分がとにかく悔しかった。そんな感情も状況の変化によって変わっていった。

噴石が飛び散らなくなり少し落ち着いてきた。そう、私は噴火の恐怖に順応してきた。恐怖と悔しさは生きることへの執着心となっていった。火山ガスの臭いはしていたが呼吸は出来ていた。「噴石さえ凌



二ノ池方面の登山道から噴火直後の剣ヶ峰。まだ噴煙に呑み込まれていない。(江田敦典氏提供)



八丁ダルミからの噴煙。多数の噴石が空に舞い上がっているのが見える。(垣外富士男氏提供)



二ノ池本館から見た火砕流のようす。剣ヶ峰を呑み込んだ後、一ノ池の淵で止まり上昇している。(小寺祐久氏提供)

ければ生きて帰れる」そう考えていた。この先どうなるのか分からなかったが、数日やり過ごすだけの装備と食糧は持っていた。生きて帰ることだけを強烈に意識し続けた。そうしなければ目の前の恐怖に呑み込まれてしまいそうだった。ケガをしないことは絶対条件だった。ここには私しかいない。そして小屋もない。「自身で解決出来なければ生きては帰れない」そう思っていた。

そして3回目の爆発があった。その爆発音は今までよりも凄まじく「噴火口は近い。いよいよ終わりか」生きて帰ることだけを必死に考えていた私にそう思わせた。たまに見える視界を、頭を突っ込んだ岩穴から肩越しに見ていると、噴石の大きさと量が今まで以上に凄まじくなっていった。その光景は笑うしかなかった。悔しいが爆笑だった。私はついに恐怖に呑み込まれてしまった。

どう頑張ってもなるようにしかならない。ジタバタするのをやめ人間の無力さを認めた。「自然には逆らえない」初めから分かっていた。そう思うと気が楽になり「噴煙を見てからの行動は最善だった。悔いもない。ここで死ぬことも含めすべてを受け入れよう」そんな心境となった。腹をくくり開き直ると恐怖はなくなった。

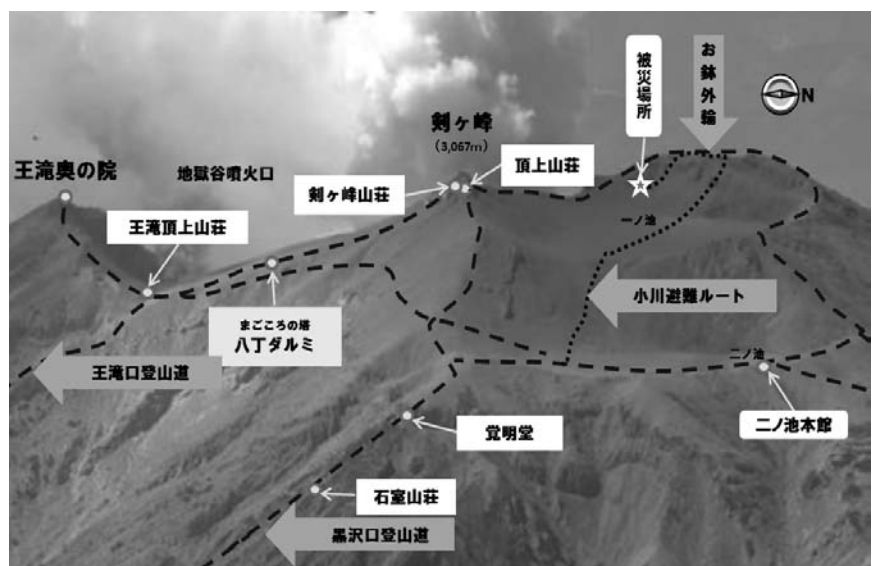
この時どんなタイミングでチャンスが来るのか想像出来なかったが、生きてさえいればチャンスは必ず来ると思っていた。「生きて帰る」その執着は何も変わってはいなかった。

噴火から1時間後。12時50分ころ。真っ暗闇の中、近くに雷が何本も走った。もはや雷など、どうでもよかった。恐くはなかった。むしろ黒一色のなかで見るその光はとても綺麗だった。視界はないが、ゆっくりと大気

が揺れるのを感じた。最初はぼんやりと、次第にはっきりとあつという間に視界が開けていった。

私はお鉢の稜線と一ノ池の中腹の斜面にいた。そこから見た剣ヶ峰、一ノ池は黒一色の世界だった。そして不気味なくらい静かだった。

私は噴火が終ったとは思っていなかった。次の爆発に備え全身の隠れる岩を探す行動に移った。降り積もった火山灰は小さな石の粒で、手ですくうとサラサラ零れ落ちた。膝上まで積もった火山灰を新雪をラッセルするかのように手も使い岩場を駆け上がると、稜線の大きな岩に張り付くように登山者がいた。この場所では私を含め5人の登山者が生きていた。1人が噴石が当たり脛をケガしたと聞いた。詳しくは見えていないが、足に大きな変形も、ズボンに血がにじんでいる様子もなかった。残りの登山者は無傷だとそれぞれから聞いた。登山者の現状を確認しただけで、私は全身が隠れる岩を探す行動を続けた。噴火が終ったと確信のないなかで、最優先すべきは「自分の命を守る」ことである。噴火口脇で、この先どうなっていくのか分からない非常事態のなか「人の命を守る」という選択は私にはなかった。自分の命を守ることさえギリギリだった。



避難ルート図 被災地点から一ノ池を突っ切り黒沢登山道へ。その距離1kmほどあった。(国土地理院提供)

4. その他

稜線から一ノ池方向に下った。体を隠せる岩を見つけないまま岩場の最終地点まで下りてしまっていた。セメントのような雨が降って来たので手早く雨具の上着を身に付けた。

一ノ池を突っ切り、二ノ池のガレまで400m弱。噴火口から離れる最短ルート。しかし、一ノ池で再び噴火すれば遮るものはない。やられる。積もった火山灰は浮石だらけの急斜面を隠していた。視界良好、体力、気合十分。新雪を駆け下りるように二ノ池のガレ目指して飛び出した。「直感」そんなカッコいいものではない。この期に及んで「自分は大丈夫」どうせそう思ったのだろう。この行動に賭けた。全力で走った。靴の裏に着いたセメント状の雨に火山灰がくっつき「高下駄」のようになる。アイゼンに腐った雪がつき「だんご」になるのと同じである。火山灰に突き刺さっているレンジくらいの岩を蹴り上げ灰を落とし走った。一ノ池の半分くらいまでは岩はいい間隔で灰に刺さっていたが、だんだん小さくなっていき、二ノ池のガレ手前ではなくなり「高下駄」のまま走った。二ノ池のガレで隠れる岩を探したがよさそうなものがなく、空が明るくなってきたのを見てこのままガレを駆け下り二ノ池本館に行こうと決めた。その距離300mくらいだろうか。私は勢いでここまで来てしまったが、稜線で会ったケガをした登山者が気になっていた。ヘリがすぐに救助に来るとは思わなかったが、ケガ人がいることと、その場所を一刻も早く伝えたかった。笛を吹きながらガレを駆け下りた。早く気付いてほしかった。しかし二ノ池本館はすでに避難をした後か人の気配を感じられず、黒沢登山道にある覚明堂避難小屋を目指した。登山道に出ると灰はうっすら5cmほど積もっていて誰の足跡もなかった。

13時10分ころ。登山道を走り覚明堂に飛び込んだ。黒沢登山道は黄色いヘルメットを被った登山者で長

い列ができ、すでに避難がはじまっていた。小屋で、ケガをした登山者の救助要請をしてもらい小屋番に噴火の状況を話した。しかし反応はにぶく温度差を感じた。核心部から生きて帰ってきた登山者は、私が1人目だった。火山ガスが漂う漆黒の闇の中、噴石が飛び交い火山灰に埋もれ、場所によっては呼吸し難いほどの熱風が吹き、火山雷、セメントのような雨と、状況は目まぐるしく変わった。噴火口から1km以上離れた小屋では想像できないくらい頂上周辺は過酷な状況だった。そんな話、近くで山を見守ってきた小屋番は信じたくなかったのだろう。

9合目から下の登山道は灰がうっすら積もっているだけだったが、その灰がとても滑りやすく多くの登山者が転倒していた。皆言葉少なく慎重に歩いていた。噴火は、突然、激しく始まり、正味1時間で終息していった。なんと内容の濃い1時間だったのだろう。私は死を覚悟したものの自分の足で下山をしている。短時間にいろいろあり過ぎて現実を受け止めきれずにいた。「何かの間違いだったらいいのに」そう思ったが、全身灰まみれの自分を見ると噴火は現実だったと思わざるを得なかった。

「剣ヶ峰にいた楽しそうだった若者は逃げたよね」ふとそんなことを思った。とにかく1人でも多くの登山者が下山出来ることを祈りながら山を下りた。



噴火当日の15時ころ、田の原登山口に表示されていた。(海東時男氏提供)

2014年御嶽山噴火の実態

9月27日11時52分ころ、御嶽山では、地下のマグマなどの熱によって熱せられた地下水が急激に気化

したため水蒸気噴火が発生した。圧力に耐え切れず破壊されるため、火口付近の岩石が砕け、噴石や火山灰として飛来する。自然界ではごく小規模な水蒸気噴火であった。この噴火の推移などは、及川輝樹氏による（2016：地質調査）などにまとまっているため、それらを参考に噴火の推移を以下にまとめる。

火口は、頂上直下の地獄谷内とその西側山腹斜面に新たに形成された。噴火警戒レベル1のため、火口周辺の立ち入り規制がなく、紅葉、晴天、土曜日、お昼どきということもあり、噴石が飛来した山頂部には200人以上の登山者がいた。

噴火警戒レベルについて説明すると、レベルを上げるのには5つの項目があり、それを総合的に判断してレベルは上げられる。そのうちの1つに火山性地震の回数が1日50回以上というのがある。9月10日は52回、11日は85回に達し、地震だけを見ればレベルを引き上げる条件は満たしていたが、その後終息したことと、警戒レベルを上げる他の4項目、火山性微動、地殻変動、火山ガスの増加、噴煙量に変化がなかったため、27日に噴火するまで警戒レベルは据え置かれた。火山性微動、地殻変動の異変を確認したのは噴火わずか10分前だった。

噴火開始直後、比較的低温の火砕流が発生し視界が効かないなか、ほぼ同時に多くの噴石が山頂部に飛来した。噴火開始から30分間くらいは多量に降り注いだ。その後その量は少なくなっていった。火砕流の発生も噴火初期の30分程度の間だったと、映像や生還者の証言から推測されている。

2014年の噴火は、紅葉シーズンの土曜日、お昼と山頂部に最も登山者が集まるタイミングで頂上直下の火口が開き噴火が始まった。噴火開始直後が最大規模であり、避難する時間が短いなかで火砕流が発生し、視界が悪いなか多数の噴石が降り注いだために、被害は拡大したと考えられる。

私はなぜ生きて帰ってこられたのか。運がよかった。

それだけなのか

私のいた場所は地獄谷の延長線上、今回新たに形成された噴火口から地形図で計ると350mほどの所だった。凄まじい噴石と爆発音を思い出せば納得できる。そんな場所から私はなぜ生きて帰ってこられたのか。

それは「運がよかったから」だとは思ってはいない。忘れてはいないだろうか。この日この場所で噴火に遭うなんて、どれほど運が悪いのかを。

噴石の飛んで来る方向、砕け散る方向は運でしかない。しかしその前に噴煙を見てから即座に危険が迫っていると判断し、命を守る行動に移っている。そしてどんな急斜面もスピードをもって走り抜けられた。地形や小屋が何処にあるのかも頭に入っていた。避難ルートに使った一ノ池がカラカラに乾いていたのは噴火前に見ていた。見ていなかったらあの時、避難ルートには使っていない。そして何より生きて帰ることを諦めなかった。「ダメかな」そう思った瞬間もあったが、やはり生きることへの執着が勝っていたと思う。

瞬時の判断、決断と身に付いた技術が行動に繋がり生きて帰って来られたのではないか。あの場所で無条件で運など転がってはいなかった。命を守る行動が運をたぐりよせたとと思う。そしてたぐりよせ、掴んだ運を持続できたことが生きることにつながったと思う。

運がすべてなら今回の噴火から学ぶべき教訓は何もない。噴火に巻き込まれれば確実に助かる術などないだろう。しかし生き残る可能性はあった。

凄まじい状況の中、何が生死を分けたのだろう

●どこにいたのか

これが生死を分けた1番の要因である。犠牲者の死因からも分かるように、2名以外の登山者は噴石

による損傷死と発表されている。噴石が多数飛来した剣ヶ峰、八丁ダルミ、王滝奥の院、お鉢でも噴石さえ凌げれば、あの噴煙の中でも生き残る可能性は高かった。剣ヶ峰は噴石を凌げた頂上の祈祷所のひさしの下、直下の山小屋に避難した登山者は助かっている。八丁ダルミ、王滝奥の院、お鉢は近くに身を隠せる岩があったのが生死を分けた。

●噴煙を見てからどれだけ早く危険が迫っていると判断でき、命を守る行動に移れたのか

視界を失うまで、八丁ダルミは10秒ほど、お鉢は20秒ほど、剣ヶ峰では60秒ほどあったと写真や生存者の証言から推測されている。視界があるうちに小屋、岩陰に避難を完了していなければ、雨のように降ってきた噴石から身を守ることは難しい。噴煙を見上げている暇も、写真を撮っている暇もない。即座に命を守る行動が求められていた。噴火のリスクは同じ場所では平等だったはずである。ただそのリスクを回避するには、噴煙を見てからの初動の差はあったのではないか。

●運

噴火口の反対側に身を隠すことが出来ても、噴石はぶつかり砕け、四方八方に飛び散った。はね方は運でしかない。視界を失う前に噴石から身を守る行動をしていなければ、まずその時点で運はない。

正常性バイアス、多数派同調バイアス

噴石が多数飛来した噴火口から500m以内の八丁ダルミ、王滝奥の院、お鉢は危険と即座に判断、行動出来たとしても小屋も十分な岩もない。剣ヶ峰は直下に小屋があり、視界を失うまで60秒はあった。核心部において生き残る可能性がいちばん高かったのは視界が他より長くあり、噴石を凌げる小屋があった剣ヶ峰だったはずである。しかし32名が噴石により命を落としている。もっと多くの登山者が助かっ

ていい場所であったと思う。

登山者の多かった剣ヶ峰では、「噴火」という圧倒的な自然現象を目の当たりにしてどうしていいかわからず、自身で判断出来なかった登山者は周りの行動に判断を委ねたのではないだろうか。非公開の噴火直後の剣ヶ峰の写真がある。多くの登山者は噴煙を見上げているか、噴煙にカメラを向けている。その数秒後に撮られた写真でも、まだ避難を開始せずに写真を撮り続けている登山者は多い。

「なぜ逃げない」。その写真は、同じ噴煙を見たはずの私には異様で信じがたく、苦しくなってしまう光景である。あの時、自分の命を守ることを以外すべきことは何もなかったはずである。

推測だが登山者は以下のような精神状態となっていたのではないだろうか。

●正常性バイアス 迫りくる危険を受け入れたくない。自分は大丈夫だと思う、思い込ませる。災害時によくある心理状態。逃げ遅れの心理。

●多数派同調バイアス どうしていいかわからない時は周囲と同じ行動をとってしまう。集団心理。

そうでなければ写真の光景は説明がつかない。あの噴煙は危険が迫っていると感じるには十分すぎる光景だったはずである。おそらく登山者は逃げ遅れの心理と集団の心理に支配されてしまったのではないだろうか。逃げなかった登山者はいない。誰もが逃げたはずである。ただ噴石が降ってきてからでは遅かった。噴石のスピードと破壊力は想像以上であった。

正常性バイアスにならずに危険と判断でき「スイッチ」を切り替え、即座に行動出来るのは15%ほどだという。私は正常性バイアスにはならなかったようだ。噴火のリスクは考えていなかったが、噴煙を見た瞬間スイッチを切り替え、命を守る行動に移れたのは多少なりとも私に危機意識があったからではな

いだろうか。100%の安全などない自然に踏み込んでいることを自覚していたからではないだろうか。

「危機意識」が正常性バイアスを打ち破ったと考える。危機意識が「スイッチ」を切り替えると考え

る。登山者に危機意識があれば正常性バイアスにはならず、それぞれが自身で判断できる自立した登山者であれば、多数派同調バイアスにもならず周りに関係なく即座に自分の命を守る行動に移れるのではないだろうか。そして自分の命を守ることに撤し、小屋などで噴石を凌ぐことができれば、今回と同じ規模の水蒸気噴火であれば生き残る可能性は高くなり、人間が予知できない阻止できない噴火から被害を最小限に留める減災に繋がるのではないだろうか。高温火砕流と高濃度のガスが発生すれば残念ながらそこで終わりであるが。

あの日、誰もが「噴火しない」急速に発達する噴煙を見るまで皆同じ意識だったなかで、いた場所以外で生死を分けたものがスイッチを切り替え、即座に危険と判断し命を守る行動に移れる登山者の危機意識だとしたら、その違いが生き残る可能性を少しでも上げるのなら、「危機意識をもち山に踏み込む」。それが100%の安全などない自然を相手に、登山者が御嶽山噴火から学んだ教訓ではないだろうか。



噴煙は大きくなり危険がさし迫っているが、その緊迫感が登山者からは感じられない。(江田敦典氏提供)

噴火から登山者を守るには、何が必要か。シェルター、ヘルメットがあればいいのか

噴火後、登山者の命を守るにはシェルター、ヘルメット、登山届、情報で一旦落ち着してしまったと感じた。どれもあればいいと思うが、これらが命を守る核心だとは思えない。

今回シェルターの役目をした小屋があっても逃げ込めず多くの登山者が命を落としている。非常事態の中で即座に行動を起こし避難することは想像以上に難しい。逃げ込めなければ命は守れない。そして視界があるなか噴火するとは限らない。小屋やシェルターが目視できなくても避難できるようにその場所や自分自身の現在地を常に意識していなければ、シェルターを有効に活用することはできないであろう。

ヘルメットはどうだろう。ないよりあった方がいいのは明らかである。砕け散った噴石や、滑りやすい火山灰での転倒には通用すると思うが、凄まじいスピードで飛んで来る噴石には通用しない。噴石とはそんな生易しいものではない。

私はシェルター、ヘルメットを否定しているのではない。「何かを持てば、造れば」そんな単純な考え方は自然には通用しないと思っている。シェルターとヘルメットで安心するのはいいと思うが、安全とは違う。設備や装備は「なぜ必要なのか」という危険の本質を見極められなければ、使いこなすことはできないだろう。物で解決するのは手段ではあるが、決して核心ではない。それは自然に対して謙虚さもない人間の傲慢な考え方ではないだろうか。

登山者に必要なものは、装備や設備の前に100%の安全などない自然に自分の意思で踏み込んだのなら「自分の命は自分で守る」。危機意識から導きだされるこの意識ではないだろうか。

意識があって判断、行動に繋がる。意識こそが噴火から命を守る核心ではないだろうか。登山者を守

4. その他

るため、たとえシェルターがありヘルメットを被り、噴火の情報が逐一伝えられすべてが整ったとしても、危険と判断し即座に行動できる登山者の危機意識が伴わなければ命は守れない。シェルターがあっても避難する行動を起こせない。危機意識があっても逃げる場所がない。どちらかだけでは限界がある。

登山者が危機意識を持って設備、装備を最大限有効に使いこなせ

れば、今回と同じ規模、内容の噴火であるのなら生き残る可能性はあるはずである。



御嶽山総合観測班提供
(2014年11月8日撮影)
剣ヶ峰にある祈祷所の壁が、地獄谷からの噴石により破損している。(御嶽山合同観測班山頂調査班提供)

活火山に登る心構え

活火山に「登らない」。この斬新かつ確実な選択以外で噴火から命を守るにはどうしたらいいのだろうか。現に日本百名山のうち32座は活火山である。とても身近な存在である。それでも登るのなら準備と知識は必要である。登山者ができるのは、まず噴火警戒レベルを調べる。気象庁のHPから見るができる。しかし残念ながら説得力はない。なぜなら御嶽山はレベル1で噴火している。そして水蒸気噴火は予知するのが難しいという。事前にできることは、自分が登る活火山の登山ルート沿いに火山ガスの危険や噴火が想定される火口があるのか、異常が観測されていないか調べる。併せて過去の噴火活動も調べておく。登山中は登山者自身が活火山に登っていることを強烈に意識し、火口付近では「今噴火したら」と頭のなかでイメージする。シェルター、山小屋がどこにあるのか頭に叩き込んでおくのは基本である。日本火山学会からは「安全に火山を楽しむた

めに」というパンフレットがあり、子供向けのものもありHPで公開されている。

そしてガスを直接吸わないようにタオルを首からかけ、火口周辺では長く休まない。少しでも異変を感じたら速やかに火口から離れ、万が一噴火したら即座に命を守る行動に移る。小屋かシェルターがあれば逃げ込む。小屋も噴石の直撃があれば必ずしも安全ではないので、できるだけ下の階に移り、柱や梁など構造上強度のある所に身を寄せる。岩陰しかない場所では火口と反対側に逃げ込む。噴石は地面や岩同士ぶつかり砕け四方八方に飛び散るので、とにかくあるもので頭を守る。あとは噴火が終ることを祈り、生きて帰ることを絶対に諦めない。登山者が噴火という自然現象に遭遇したとき、できることはせいぜいこれくらいだろう。何が正解なのかは結果からでしか分からない。その時の自分の判断を信じるしかない。噴火に遭うのは恐ろしい。しかし無駄に恐れるのではなく「正しく知り、正しく恐れる」姿勢が必要ではないだろうか。日本は火山列島である。火山を知り親しみ、危険があることも理解し恐れることが突発的な噴火から身を守る近道だと思う。噴火さえしなければ山頂部には美しい湖があり、雄大な景色が広がり、自然の魅力が満ちあふれている。それが火山でもある。



エメラルドグリーンに輝く御嶽山三ノ池。山には美しさと厳しさが共存する。(著者撮影)

おわりに

噴火は災害であり、登山者自身の過失が原因の遭難とは異なるため登山者の意識について触れられることはなかったのではないか。それは命を落とした登山者を責めていると捉えられてしまうからだと思う。

生死を分けたのは「運が悪かった」そう言えば誰も無駄に傷つかない。その言葉は一見思いやりのある謙虚な言葉に聞こえるが、私には噴火災害と向き合うことを放棄する言葉であり、過酷な状況の中、最後まで生きようと、家族の元に帰ろうとあがいた登山者の生きざまを否定する言葉に聞こえてしまう。私はあえて噴火を通して登山者の危機意識を聞いたと思った。生死を分けたのは運はもちろんあるが、危機意識が導く即座の判断力、行動力が重要だったと思っているからだ。あの状況、運だけでは帰ってはこられない。もちろん生還できたからといって偉そうに問うつもりはない。生死は紙一重であったし、噴煙を見るまで山の恐さを私は忘れていたのだから。

あの日、山を始めたばかりと思われる登山者が多く登っていた。逃げる時間はわずかだったなかで、山に慣れていない登山者に「即座の判断力、行動力」というのはどれほど酷なことを言っているのか承知している。噴火のリスクは平等であり非情な現実であった。それでも即座に命を守る行動に移れていれば、もっと多くの登山者に生き残る可能性はあったはずである。そのことが、ただただ悲しく、悔しい。

たとえ死者に鞭打つ言葉のように聞こえても、自分の意思で山に行くのなら「危機意識をもち山に踏み込む」そう言いたい。なぜなら多くの登山者の死からわずかでも、この先に繋がる教訓をくみ取り噴火から命を守る手がかりを残したい。運がすべてで終わりにするのなら学ぶものは何もなく、登山者の死は無駄になってしまう。噴火は教訓を残せなかった、ただ悲しいだけの過去になってしまう。

あの日、穏やかだった御嶽山は突然噴火した。噴煙は自らの意思を持った生き物のように躍動感に溢れ、登山者を圧倒し自然の厳しさを見せつけた。同じ山とは思えない状況となった。しかしどちらも紛れもない御嶽山の姿である。噴火に遭えば人間は悲しいほど無力である。しかし絶対的な存在の自然に対して謙虚な気持ちを持って危険に備えることや、考えることでは決して無力ではないと思う。自然を取り巻く環境は変わり、どれほど便利に快適になったとしても、山は時として命と向き合う場所であることは変わらない。自然の厳しさは昔も今も、この先も変わらない。変えられるとすれば、登山者の向き合い方だけではないだろうか。美しさも恐ろしさも知って山と向き合うことができるのなら、山はより素晴らしい姿を、感動を、登山者に与え続けてくれる場所である。

最後に、噴火災害で登山者が傷つき命を落とすのは、今回が最後であることを切に願っている。以上

参考文献

頂上周辺地形図

小川さゆり「御嶽山噴火 生還者の証言」山と溪谷社
噴火の実態

及川輝樹「日本の科学者 特集論文御嶽山2014年噴火」
正常性バイアス、多数派同調バイアス

広瀬弘忠「人はなぜ逃げおくれるのか」集英社新書

写真提供

江田敦典氏

垣外富士男氏

小寺祐介氏

海東時男氏

国土地理院

小川さゆり

御嶽山合同調査隊山頂調査班